

report Multnomah Neighborhood House

place Multnomah Neighborhood House

date 20, Aug, 2013 (Tue) 18:300~20:00

【Fire Station】

イブニングサイトビジットで訪問先のリクエストがありますか、と聞かれて、どうしても、ネイバーフッド・ハウスに行きたいと答えた。そして PSU スタッフが交渉してくださり、晴れてポートランド南西部のマルトノマ地区のネイバーフッド・ハウスに行くことができた。

なぜネイバーフッド・ハウスに行きたかったか。連邦政府の低所得世帯児童向けプログラムであるヘッド・スタートに関心があり、それは地域のネイバーフッド・ハウスで実施されている、と知ったからだ。

ポートランドのメトロポリタンからバスで 20 分ほど。のどかで小さなストリートで下車する。カフェや玩具店などが並び、パブではご近所さんたちがビールを楽しんでいる。その中心に、マルトノマ・ネイバーフッド・ハウス(以下、MNH)があった。

代表のリック氏と、前代表で商工会会長のランディ氏の出迎えを受ける。MNH の本部事務所は、とても古い建物で、以前は消防署だったという。建物の隣に畑があり、多くの種類の野菜と、1 本の林檎の木が植えられていた。

1905 年に移民問題への対応を目的にスタートした MNH は、今ではネイバーフッド・アソシエーションや商工会とのパートナーシップのもと、地域を包括したソーシャル・サービスの提供を行っている。サービスの目的は①飢えと住宅喪失を防止すること、②若者から高齢者までを教育すること であり、サービスの対象は、ケアの必要な子ども、若者、シニア、貧困者 である。ポートランド全体で 23 か所のネイバーフッド・ハウスがあり、それぞれが独立運営で担当する地区をカバーし、連携を保っている。

MNH の予算は年間 500 万ドル。80%以上が公費(連邦政府、州政府、郡政府)からであり、12%が教会や企業からの寄付、8%が個人からの寄付で賄われている。フルタイム職員は約 70 人、パートタイム職員は 40~50 人、利用者は年間約 1,600 人という。

【Food Donation】

事務所に招き入れられて驚くのが、棚に並べられたパン。本当に、パン屋さんのように、商品棚にずらりとパンが並んでいる。

地下の倉庫に案内され、さらに驚く。缶詰、赤ちゃんのオムツ、新鮮な野菜。すべてエマージェンシー・フード・ボックス・プログラム(以下、EFBP)のために寄付されたものだという。オレゴン・フード・バンク、ボーイスカウト、教会、企業、ファーマーズ・マー



ケットの出品者、ご近所の家庭菜園の余りなど、「健康的な食品」が、ここに寄付される。

EFBP は、日本の公的扶助に当たるフードスタンプとは全く異なる制度である。フードスタンプでは対象となっていないトイレットペーパーやオムツや生鮮野菜も支給対象であり、かつ、缶詰なども個人の必要に応じて品目を選ぶことができ、1箱で1家族が3～5日生活できる構成となっている。

(↓左がランディ氏、右がリック氏。「生鮮野菜の個数制限はありません。でも、どうぞご近所の方々と分け合えるようにしてください」と、手書きの張り紙がしてある。)



EFBP は対象者に制限がない。低所得である以外の要件は問われない。近隣の低所得者世帯、公的扶助受給者、ホームレスなど、「飢え」に直面する全ての人たちが対象である。

ソーシャル・サービスを受給するのに特段の要件がないというのも、ボックスの中味を「選ぶ権利がある(people has a choice)」というのも、日本では余り考えられない。また、MNH が市政府から権限を委任されており、同様に市政府から権限を委譲されているネイバーフッド・アソシエーション、その他、商工会、学校、教会等とパートナーシップを築き、平等、教育、食料、接近性、住宅、土地利用などについて、独自のプログラムを提供している、というのも、行政が処分権を持つ日本社会福祉のあり方からすれば、驚くようなシステムである。

【Social Services】

他にどんなソーシャル・サービスを提供していますか？ という問いに対しての答は、次のとおり。

①子ども向けプログラム

連邦政府のサービスである Head Start Program



Child Care Center



いずれも低所得者層(below poverty line)の子どもが対象である。子どもに対する早期の教育機会の提供と、保護者に対する育児支援・親教育などが含まれたプログラム。

②若者向けプログラム

SUN

これは、週に4回行われているハイスクール生徒向けのプログラムで、学校に参画(engage school)しつつ、生徒が関心を持って参加できることと学力保障をセットにするため、例えばサッカー教室と作文教室をセットで実施するなど(作文を書いてからサッカーをする)、生徒の意向を尊重したプログラム内容となっている。

School Attendance Program

学校へ行くための支援。日本で言う「不登校」とは違うが、学校へ行かなくなる子どもは多い。学校教育から離脱しないため、こちらも学校に参画する形で行われる。

(地域のハイスクールは、MNH と隣接していて、どこからが学校の敷地で、どこからがMNH の敷地なのか、判然としない状態である。ハイスクールでボランティア参加が義務付けられていることもあり、生徒が MNH に出入りすることに関して、かなり敷居が低い印象を受けた。)

③高齢者向けプログラム

移送サービス(通院や買い物だけでなく、旅行も可)、レクリエーション、生涯教育、健康教育に参加してもらったり、配偶者に先立たれた高齢者を見守ったり、幅広いプログラムが展開されている。多様なニーズに制度を合わせていく。

【Not only welfare】

MNH の機能は、ソーシャル・サービスの提供だけではない。

Multnomah Arts Center Lower Parking Lot
Stormwater Project

These new stormwater management facilities will collect runoff and allow pollutants to settle out before the water enters Tryon Creek.

FOR MORE INFORMATION
503.823.7740

ENVIRONMENTAL SERVICES
CITY OF PORTLAND
working for clean rivers
www.portlandoregon.gov/bes/artscenter

MNH に隣接するアートセンターの駐車場が低地であるため、しばしば浸水することがあり、現在、改修工事中である。この工事には、緑化と浄水の機能も兼ね備えるファシリテーションが用いられているが(ポートランドでは一般的な手法)、MNH もこのファシリテーションに協力している。地域の環境保全に関わることなので、当然なのだそうだ。

その他、マルトノマ・ファミリー・デイという催しがあり、近隣住民ほぼ全員が、家族でボランティア活動をする日があるのだそうだ。と言っても、お祭りのような状態で、それぞれが出来る範囲のことをして、あとは食べたり踊ったりして、近隣の強い絆(**very strong relationship**)を深め、さらに3時間で2,900ドルの寄付が集まったそうだ。ネイバーフッド・アソシエーションと商工会との「強い絆」が、このイベントを支えている。

また、MNH はクリニックも運営していて、低所得者に対する無料診療制度も整備している。「資産」ということ言えば、ホームレス支援のためのアパートメントも24戸所有していて、地域で必要な「生活のためのサービス」を、全て提供できるのだ。

考えてみれば、「ソーシャル・サービス」は「ソーシャルウェルフェア・サービス」ではない。こんなことに、何故、今まで気がつかなかったのだろうか？

【Equality, Education, Health】

実は、ほとんどの話は、MNH の向かいのパブで地ビールを片手に聞いたものだ。

1杯目のビールが終わる頃、日本暮らしの経験のあるランディ氏に、日本の貧困者対策を聞かれた。「生活保護という制度があります」と答えたら、「高齢者は？」と聞かれ、「生活保護は年齢は関係ありません」と説明するが、納得してもらえない。介護保険は別の制度で、と説明するが、別の場所でやっても相談する先は同じではないの？と不思議がられた。制度が先にあるのではなく、多様なニーズが先にある。そんなことを言われた気がする。

2杯目のビールの途中で、リック氏に、ご長女がオバマ大統領と写っている写真を見せていただいた。ずっと地域でボランティア活動をして、大統領選挙の時にオバマ陣営でボランティアをしたのをきっかけに、現在は政治関係の仕事をしておられるのだそうだ。次女はソーシャルワーカーをしておられるそうで、「社会福祉は慈善だけでは成り立たない。政治と社会正義が必要。ふたりの娘が、ひとり政治を、ひとり社会正義を選んだ。私ほど幸せな父親はいない」と、胸を張って話しておられた。

今、日本が目指している総合相談が、ここでは当たり前のこととして扱われている。ソーシャル・サービスは、社会教育や健康とあわせて提供され、市政府でなく、民間セクターが総合相談を受け、必要な生活上のサービスを包括的に提供し、今日の食事にさえ困っている人に対してもリスペクトを忘れない。それは、移民問題から始まったという歴史的背景も影響しているかも知れないが、**Helping Neighbors Help Themselves**(隣人を助く者は自らを助く)という信念、自分たちのコミュニティのニーズに応える責任感、専門性の高

いスタッフとボランティアとの協力関係など、様々な要因が相互に影響し合って醸成する相互扶助の精神に裏打ちされて、本当の平等を目指すことで可能となる、とても地道で誠実な取り組みであった。

